



子どもたちと
ともに学び
成長する



幼児教育の現場で 求められている 即戦力としての 保育者の育成に向けて

幼児教育の現場では、保育者自身が高い資質を備えているかどうか問われます。平成13年には、文部科学省で幼児教育振興プログラムが策定され、養成校の段階でも実践的な研修の充実が求められるようになってきました。2年間という短い期間で特別な専門性を備えた即戦力となりうる人材の育成はかなり難しいのが現状ですが、当校では、保育者の育成にあたって、まずは学生の主体性をのばし、感性を磨くことを大切に行っています。そのために重要なのが、実習による実践の積み重ねです。当校では附属幼稚園と学外で、計10週の実習を行っています。そこで初めて、保育者自身の心の豊かさ、意欲、生きざまがあらわになり、短大入學までの20年近くで形成された本人の資質に対する自覚が生まれます。現場に出て初めて、学校で学んだ間とのギャップを感じ、悩む学生も多く見受けられますが、一方で、1年次に学んだ保育原理の理論と教育の現場での体験が繋がり、多角的視野から幼児教育のあり方を見よつと

する姿勢も生まれてきます。結果、理論を理解しよつとする力、授業態度が飛躍的にのびてくるのです。私たちがめざしているのは、幼児の心を理解する力、カウンセリಂಗマイソドで子どもに接することができる保育者、遊びを主体にした総合的な指導力を備えた保育者の育成です。幼児教育は、小学校の「ミニユア版」的に、子どもたちに知識と技能を身に付けさせる場ではありません。「三つ子の魂百まで」という言葉に現わされるように、心の教育こそが大切な時期の子どもと接する保育者には、感性の幅を広げ、気付き力を磨くことが求められるのは当然のことといえるでしょう。また、子どもたちの感動体験に立ち会い、気付きを発見して行動することの重要性を認識すること、子どもたちのあが



ままの姿を理解し、心に届く評価をして心の育ちを促すことも求められます。一人ひとりの心を見ながら柔軟に対応し、幼児発達の特徴を考えながら、プロセスを大切にしながら教育を行うことが大切なのです。

多様な経験を通して主体性を発揮し、感性を磨くために組まれていく多彩なカリキュラムに対して、学生たちは非常に素晴らしい態度で取り組んでいます。保育者として求められる仕事は大変厳しく、努力が求められるのですが、子どもと保育者が一緒にプロセスを達成するという喜びを味わうことができます。また、短大では、卒業生を対象にしたリカレント教育としてサマーセミナーを開催し、その後の指導にも力を入れていきます。常に自身の保育を反省し、拓いていくという考えに基づいた保育者こそ、私たちがめざしている保育者像だといえるのです。



尚綱短期大学 子育て研究センターとは

平成12年、全国に先駆けて設置した「尚綱短期大学子育て研究センター」は、地域に役立つ資質を備えた保育者の育成にむけて、地域社会との連携を図りながら、ユニークな活動を展開してきました。ここでは、発達保証を原点にした子育てに関する調査研究、保育者養成の充実と保育所、幼稚園、家庭などにおける子育ての充実振興の推進を目的としています。また、公開シンポジウムや熊本県下における子育て支援センターの調査、地域プロジェクトとして関係諸団体へのアンケート実施など、地域におけるさまざまな活動を行ってきました。

平成16年には、その研究報告を集録した定期刊行物「次世代育成研究 児やらい」を創刊。全国的なデータの収集・分析などを通して、国の政策に基づく子育て支援の方針をとらえなおしたり、地域社会で求められる子育て支援のあり方などについて、従来の説にとらわれることのない、新たな提言の発信を行っています。

多くの学外実習を通して、 子どもとの接し方を学ぶ

保育園の先生に憧れ、子どものお世話をする仕事に就きたいと思ったのが、幼児教育科に進んだきっかけです。2年間で専門的な知識を身につけるのは大変ですが、尚綱附属幼稚園や学外での実習を体験することで



平成10年卒
尚綱附属幼稚園勤務
福山 智子さん (27歳)

授業内容がより理解しやすくなりました。特に最初に行う附属幼稚園の実習では、挨拶の仕方から子どもへの接し方、報告の仕方など親身に指導していただき、学外で実習する際の安心感につながりました。

卒業後は附属幼稚園に勤務し、お姉さんの立場で子どもと遊んでいた学生時代とは変わって、一人ひとりの子どもを見守る視点を持つことができるようになりました。子どもは遊びを通して疑問を持ちたり、時にはけんかをしたりします。そこに少し手助けをすることで、子どもの大きな成長に役立ちたいと思っています。

自らの経験を地域の 子育て支援活動に役立てたい

学生時代を振り返ると、課題の提出やピアノの授業などを必死に頑張った記憶があります。子どもが好きで、人とふれあう仕事がしたいと選んだ進路でしたが、その思いは実習を経験してより強くなりました。尚



昭和57年卒
菊池さくら保育園勤務
幸美さん (43歳)

綱で厳しく指導していただいたことが、現場で一番役に立っています。

卒業後、新設されたばかりの現在の保育園に勤務し、何もない状態から少しずつみんなの園の環境を整えてきたので、仕事に対する思い入れも深いです。2年程前から地域に密着した子育て支援センターを立ち上げています。週2回の活動は妊娠中から就学前の子どもまでを対象にし、子どもの友達づくりはもちろん、保護者同士のネットワークにも役立っています。保育のキャリアと自分の子育て経験を活かして、保護者の身近な相談相手になれることもこの仕事の大きなやりがいです。

施設実習をきっかけに 障害者福祉の世界へ

短大を卒業後、知的障害者の支援施設に勤務しています。施設で生活する約50名の方と日常生活を共にし、自立をサポートする仕事です。学生時代にこの施設で実習した際、利用者一人ひとりを尊重しながら支えている



平成16年卒
第2明星学園勤務
岩本 直子さん (21歳)

点に魅力を感じ、進路を決めました。就職から一年経った現在も、その気持ちは変わりません。日々の活動を通して利用者と信頼関係を築くことで、障害者の方たちは次第に心を開いてくれるようになります。現在は高齢者4名のグループを担当しており、今後は専門的な資格を取得したり、老人性認知症の療法を学びたいと考えています。

学生時代に複数の施設で実習したことが、未知の仕事に通りあい、自分の可能性を広げるきっかけになりました。2年間妥協せずに学んだことが、現在の仕事につながっているのだと思います。

就職して再発見した 幼児教育の魅力

長年の夢だった幼稚園の先生になつて3年目。子どもたちが私のことを先生と呼んでくれることに、毎日喜びと責任を感じています。仕事をする上でいつも心がけているのは、子どもと同じ目線で物を見て、感じる



平成13年卒
大塚幼稚園勤務
浦田 志保さん (23歳)

ということ。そして友達の一入のようになつて接するということ。在学中、実習や就職活動を体験するうちに、自分に動まるのたろうかと自問自答して自信をなくした時期もありました。しかし実際に働きはじめると、子どもたちから教えられることが多く、自分も一緒に成長している仕事だと思ふようになりました。今はこれが天職だと思っています。

元クラスメイトたちとは、年に1回集まる機会を持っています。情報交換をしたり、相談をしたり、今でも励ましあえる仲間がいるのも心強いことです。